

『思いやり』って難しい？

コロナ感染者数が第6波のピークを過ぎ、減少傾向を示したのかと思っていたところ、GWの前年比数倍の人出箇所多出の影響なのか、GWが終わると前週比増の報道である。そういえば通勤電車の乗車人数もコロナ前に比べ若干少ない程度で、通勤時間帯はかなりの混雑が戻ってきている。リモートワークが定着し在宅勤務者が多くなったと言われるが、やはりそれは一部に過ぎず通勤ラッシュが経済に先行して戻ってきたのかもしれない。

4月某日の朝、通勤電車での出来事。かなり乗降客の多いJRの某駅から電車に乗ると、次の駅で運良く私が立っていた目の前の座席の客が降りて、珍しく座ることができた。スマホに目をやりながら数駅通り過ぎ、ふとスマホの画面から目を離すと目の前に三十代（？：マスクを着けているので判断が以前に増して難しい）と思われる、若干“お腹が膨らんでいる”と思われる女性が立っているのに気が付き、“マズイ！妊婦さんだ。席を譲らないと”と思い、慌てて「すみません、気が付きません。どうぞ」と言い訳がましい言葉を発しながら立ち上がり、席を譲ろうとしたところ、その女性はこちらの意を察したのでしょうか「いいえ違います。ただ太っているだけです。」と言い、座ろうとしません。「あっ。それは失礼しました。」と謝りながら（結構恥ずかしい思いで）再度座った。座りながらその女性の左手薬指を見ると指輪をしておらず、持ち物を見まわしてもマタニティマークは付いておらず、また優先席でもなかったことから、大変失礼なことをしたと反省する一方で、自分では「思いやり」からとった行動が相手を“傷つける”こともあるという、『思いやり』の難しさを認識した（今になって思うと、「レディーファースト」ですから」とか「次降りますから（嘘でも）」とか言って座らなければ良かったのかもしれない）。

また数年前の夕方の通勤時間帯を少し過ぎたもののまだ比較的混雑している電車での経験であるが、たまたま「優先席」横の乗降口から乗ったところ、優先席に座っていた大学生と思われる青年が、スッと立ち上がり、私に向かって「どうぞ」と言って席を譲ってくれた。多少疲れ気味だったこともあり、「どうも」と軽く会釈し有難く座らせて頂いた。しかし座ってから「俺は「優先席を必要とする高齢者」に見られたのか？」、「いや、多分青年は若い自分が優先席に座っていて、青年と比べて“若くはない”俺を立たせているのに抵抗感があっただけだろう」等々勝手に思いを巡らせながら帰ったことがあった。青年の「思いやり」を素直に『ありがとう』と受け入れようとしない“ひねくれ者”の自分に「これからは素直に『ありがとう』と応じよう」と心の中で言いきかせた。

私自身は空席がある場合を除き、「優先席」でなくとも全席で“席を必要としている”人に譲る習慣が浸透するのが望ましいと思っている。しかし過去に横浜市営地下鉄や阪急電鉄で「優先席」を設けず「全席優先席」制を実施したことがあったが、やはり過度に集中する通勤混雑等の社会環境から浸透せず、「優先席」設置に戻った。このことは「優先席」の設置が稀な諸外国に比べ日本人が「思いやり」で劣ることとは思わない。表現の仕方が下手、他人の目を気にし過ぎる（恥ずかしがりや）等の“日本的気質”が主な阻害要因ではと経験的（独断的？）に認識している。

あまり堅苦しく考えず、気軽に『思いやり』を体現し、素直に『ありがとう』と受け入れる、そんな社会が防災・減災、強靱な地域・国土形成の源であり、延いては戦争の無い平和でサステイナブルな世界に繋がると信じている（ちょっと飛躍し過ぎ？）。